～作品紹介～

一．西原英臣

臨書　楷書　鄭道昭『鄭義下碑』　半切

「滎陽鄭文公之碑魏故中書令祕書監使持節督兗州諸軍事安東將軍兗州刺史南陽文公」

久しぶりの作品制作になりました。鄭道昭らしい線質と文字の配置に気を配りながら作品を仕上げました。まだまだ未熟な部分も多いですが、頑張って続けていきたいと思います。



二．平川真弓

臨書　行書　米萬鐘『題画七言絶句軸』　半切

「半枕山煙半水涯漁単樵斧自山豪同雲」

筆が思うように動かせませんでした。まだまだ練習の必要な素人です。とにかく全体のバランスを考えて書きました。さらに練習を積んで納得のいく作品を書いていけたらと思います。



三．廣畠知直

臨書　篆書『庚贏由銘』　全紙

「隹王十月既望、辰在己丑。王、格于庚贏宮。王、蔑庚贏曆、易貝十朋、又丹一管。庚贏對揚王休、用作厥文姑寶尊彝。其子々孫々、萬年永寶用。」

所謂金文という、篆書の古いやつです。字形の面白さに加えて、文字の起源を訪ねる楽しさがありました。文字の大きさにバラツキがあるので、統一感を出すのに苦労しました。特に、贏（ヤドカリの象形文字）には悩まされたように思います……。



四. 小島千明
臨書　行書　董其昌『菩薩蔵経後序』　半切
「常樂之道猶且事光圖史振薫風」
大きな紙に初めて書きました。とても大変でしたが、勉強になりました！



五. 鳥越亜希
臨書　草書　米芾『群玉堂米帖上冊』　半切
「洛学不巧似令人弁董研也古人日比」
あっさりした雰囲気に一目惚れしてこれを書こうと思いました。勢いに任せて書けば、軽く、貧相になってしまう書です。
なので、一枚書き終わるたび、「ぷはーっ」と一息だしてしまうほどに流れを重視して丁寧に書くことに気をつけました。自分の直観は鋭いのか、相性は抜群だとひとりで勝手に思い込んでいます。



六. 稲留直子
臨書　隷書『曹全碑』　半切
「君諱全字景完敦煌效穀人也其先盖周之胄武王秉乾之機翦伐殷商既定爾勳福祿攸同封弟叔」
昨年の秋季書展に引き続き隷書に挑戦しました。前回は文字を並べるのに精一杯で硬い感じの作品になってしまったので、今回は力まずに楽しんで書くことを心掛けています。



七. 砂川祐子
臨書　行書　張瑞図『行書杜甫五律詩軸』　二尺×六尺
「何年顧虎頭　満壁画滄州　赤日石林気　青天江海流
錫飛常近鶴　杯渡不驚鴎　似得盧山路　真随恵遠遊」
以前、張瑞図の作品を臨書したとき、その「線」と「空間」に魅せられました。そして、今回もっと彼の作品に挑戦したいとの思いから、この作品を臨書しました。鋭くキレのある柳葉形の線と、一見不均衡に見える文字の中の空間―彼と向かい合いながら、これらを自身で表現することの楽しさと難しさを改めて感じました。

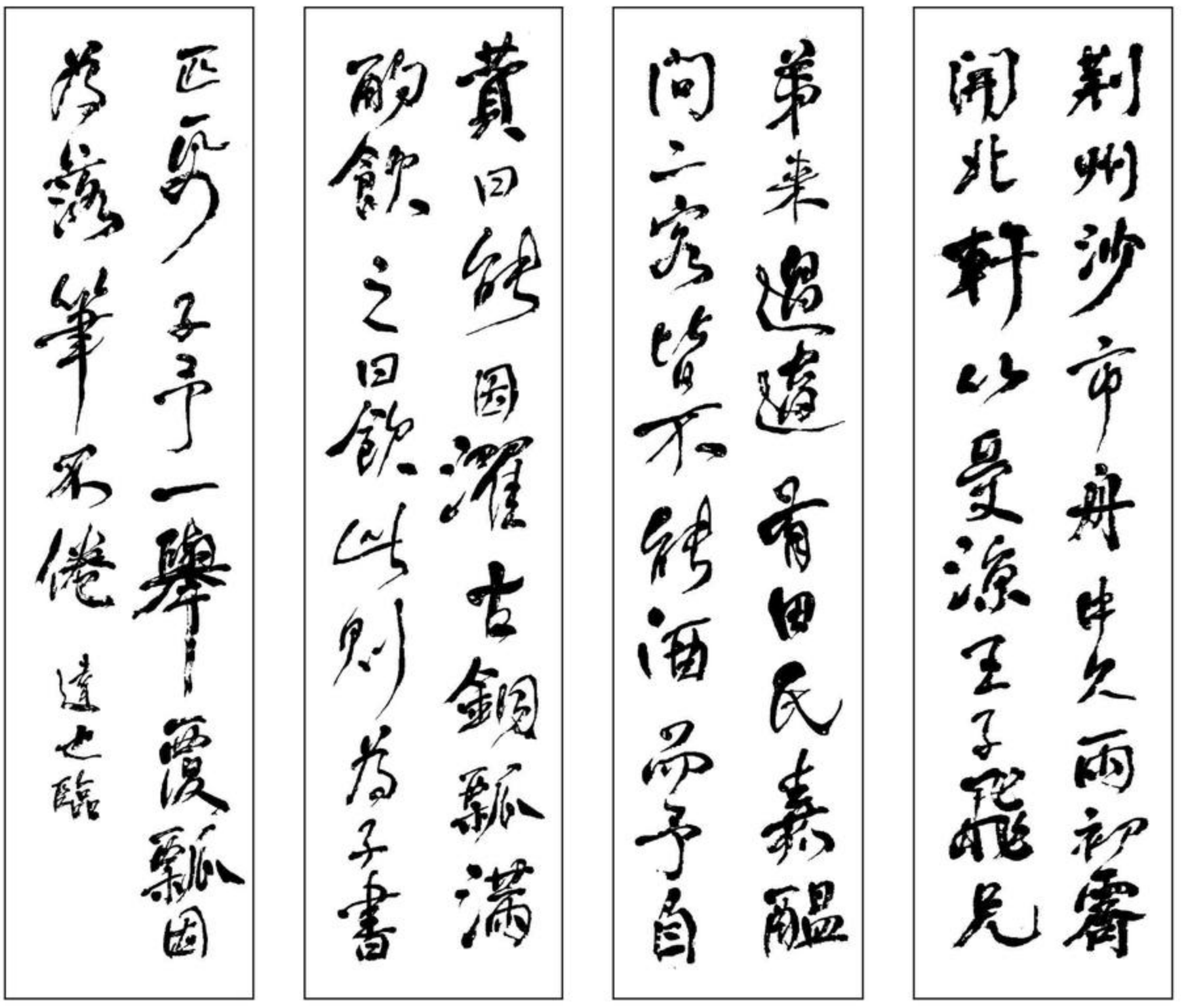

何年石林洞
幸青三江海
陪仙白鹿乡
簪真延鹤遠
臨張瑞圖詩子

八．上原達也

臨書　行書　何紹基『行草山谷題跋語四屏』　半切四連

「荊州沙市の舟中、久雨初めて霽れ、北軒を開き、以って涼を受く。王子飛兄弟来たりて過り、適たま田氏の嘉醞有り、二客に問うに、皆な酒を能くせず。而して予は自賛して曰わく、能く古銅瓢を濯ぐに因りて、満酌之を飲みて曰わく、此れを飲めば則ち子の為に匹紙を書せんと。子と予とは一挙にして瓢を覆す。因為に落筆倦まず。」

半切の四連作品ということで、一枚目から四枚目までひとつの流れを断ち切ることなく書き上げました。線の強弱、墨の量などに気を遣い、原本のさまざまな表情を見せる美しい線を表現しようと試みています。文字の配置や構成には非常に苦心しましたが、結果として余白を生かし黒と白の対比が映える作品が出来たと思います。

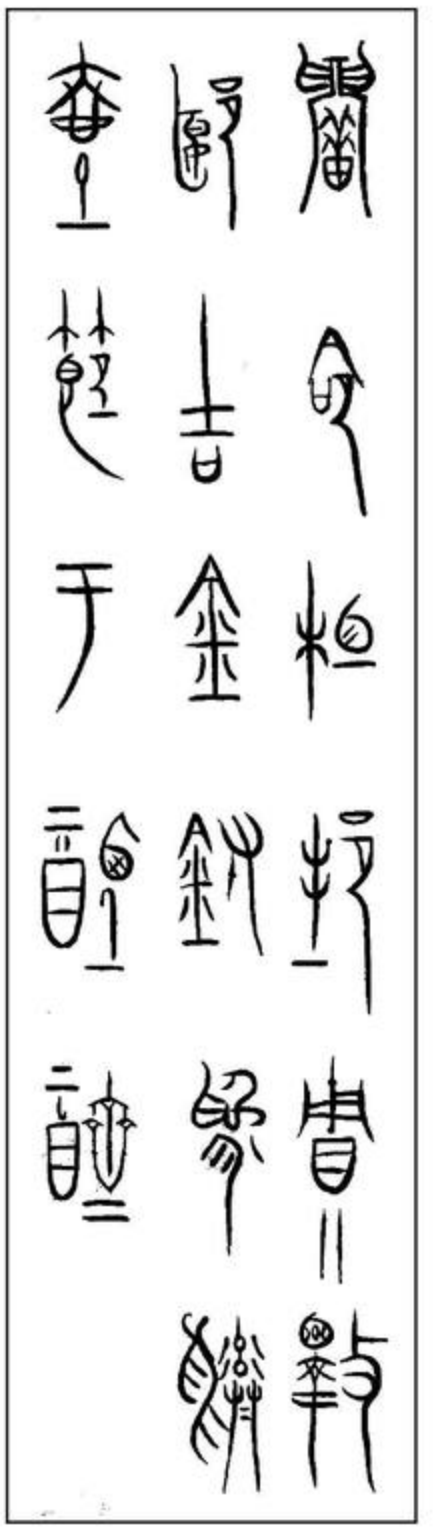

荊州沙市舟中久雨初霽
開北軒以受涼王子飛兄
第来過適値田氏嘉醞
問二客皆不能酒而予自
賛曰能因濯古銅瓢満
酌飲之曰飲此則為子書
匹紙因覆瓢一挙
為落筆不倦
臨山谷題跋語四屏
達也臨

九．大石雅典

臨書　篆書『中山王　方壺』半切

「命相邦　擇燕吉金、鑄爲　壺。節于」

前回硬い字体の篆書を書いたので、今回は少しお洒落な雰囲気の篆書を書きました。三〇〇〇年ほど前に書かれたものなのですが近代にも通じる美しさを持っており、そこが気に入っています。



一〇．河合直樹

創作　行書『兆』三尺×四尺

一口に「兆し」とは言っても、その意味するところは人によって様々です。数年を経れば、私は社会の一員として本格的に身を置くことになるでしょう。この作品には、未だ漠然としている将来像をしっかりと見据え、開拓していこうという決意を込めました。

今皆さんの心には何が兆していますか。



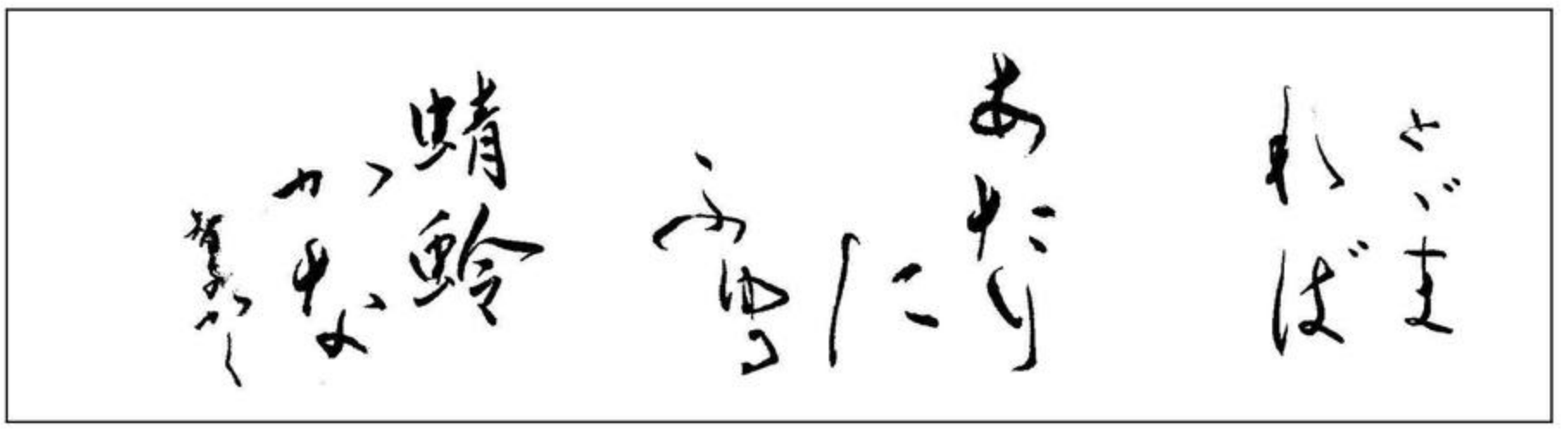
一一．松永智子

創作　調和体

『家路』中村汀女の句より　半切

「とどまれば　あたりにふゆる
蜻蛉かな」

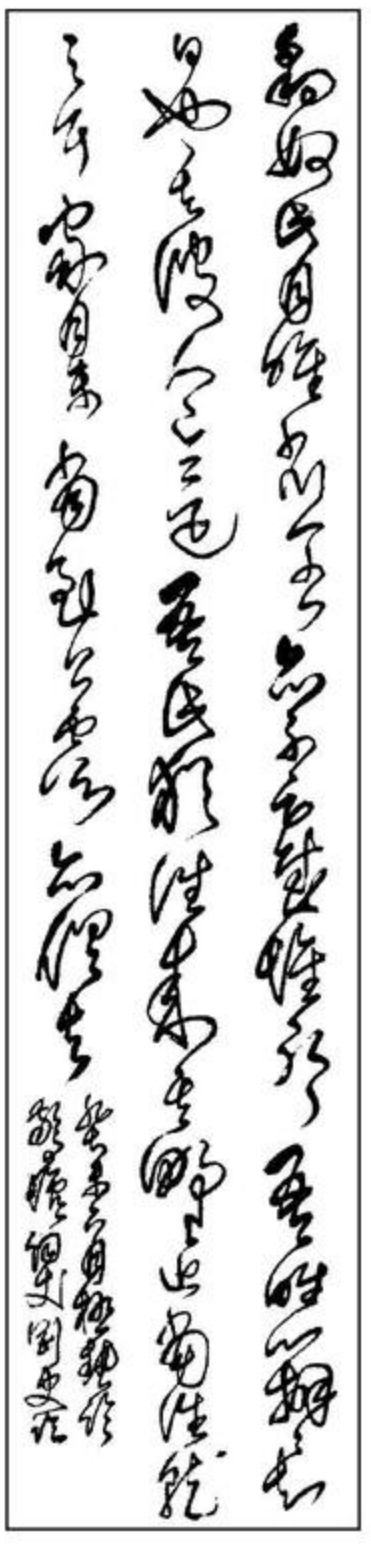
夏の帰り道には、とんぼが飛んでいました。水田に囲まれたあぜ道を、進んでは止まり、留まっては進んで帰った日々が思い出されます。記憶の中の夏の夕暮れを、現代女流俳人の草分けとして知られる中村汀女（一九〇〇～一九八九　熊本生れ）の句に見出しました。漢字の少ない平仮名ばかりの句で構成には最後の最後まで苦労しましたが、墨汁の「黒」と余白の「白」で虫の音や水の匂いのする世界を表現するよう心がけました。



一二・三幣剛史

臨書　草書　王鐸『臨王献之・王羲之帖』　二尺×八尺

初めて王鐸の草書作品にチャレンジしました。行書よりもさらにリズムよく軽快に筆が動いていますが、そのテンポについていくにはまだ相当の練習が必要だと感じました。王鐸作曲の音楽を、早く奏でられるようになりたいものです。



一三・白田全弘

臨書　行書　傅山『行書七絶』　二尺×八尺

「羅衫葉々繍重々金雁銀鴈各一叢毎遍舞頭分兩向太平萬歳字當中」

以前から一度書きたいと思っていた傅山の臨書に、今回初めて挑戦してみました。奔放に筆を走らせたような独特の線質をうまく表現できず、苦労しました。



一四・河野宏明

臨書　楷書　光明皇后『樂毅論』　二尺×八尺

「賢者託心鄰国傾慕四海延頸思戴燕主仰望風声二城必従則王業隆矣雖滝留昭之東海属之華」

『二尺×八尺なんて、ただ大きいだけじゃん』と軽い気持ちで挑戦してみました。しかし、文字数が多くなりすぎて全体のバランスを整えるのに精一杯だったため、細かい部分には全く手がまわりませんでした。……完敗です。



◆臨書◆

過去の優れた筆跡を手本として書くことです。

その際には、古典の字形、用筆そっくりに迫ることや、古典に漂う雰囲気や運筆のリズムなど、形以外の要素に重点を置いてとらえることなどを主な目的にします。

◆創作◆

自らの創意工夫による書の表現をいいます。

表現意欲、素材（語句、詩文）の選定が創作活動における基盤を成しています。表現を通して書き手の個性が表れる作品を目指します。臨書研究によって表現の原理、技法を習得することで創作作品に確かさと豊かさがもたらされます。

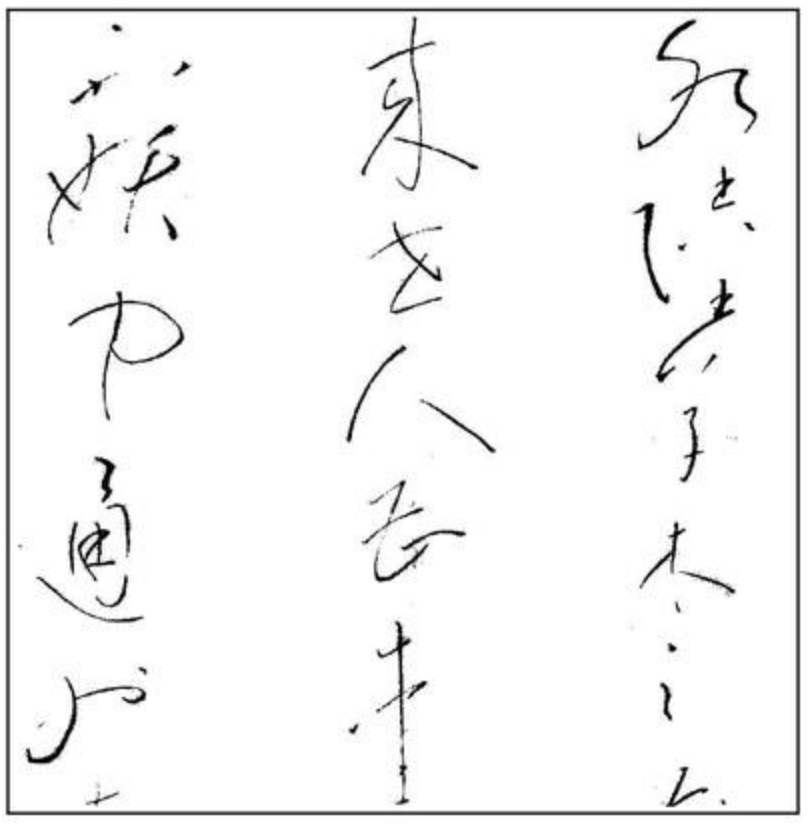
一五・東恵理子

創作　草書　周茂叔『愛蓮説』二尺×八尺（二軸）

「水陸草木之花。可愛者甚蕃。晋陶淵明獨愛菊。自李唐來。世人甚愛牡丹。予獨愛蓮之出於泥而不染。濯清蓮而不妖。中通外直。不蔓不枝。香遠益清。亭亭浄植。可遠観而不可褻翫焉。予謂。菊華之隠逸者也。牡丹華之富貴者也。蓮華之君子者也。噫菊之愛。陶後鮮有聞。蓮之愛。同予者何人。牡丹之愛。宜乎衆矣。」

花を愛でる詩です。そのやわらかな心を表現しようと描きました。草書なので、わかりにくい文字が多いのですが、簡単な文字もたくさん見つけることができるでしょう。

「牡丹、蓮、菊」の花の名前や、今の漢字とは形が異なりますが「愛」という字が6回も出てきます。詩の後ろに描いた篆書は題名と作者名です。詩の引き立て役になれば幸いです。

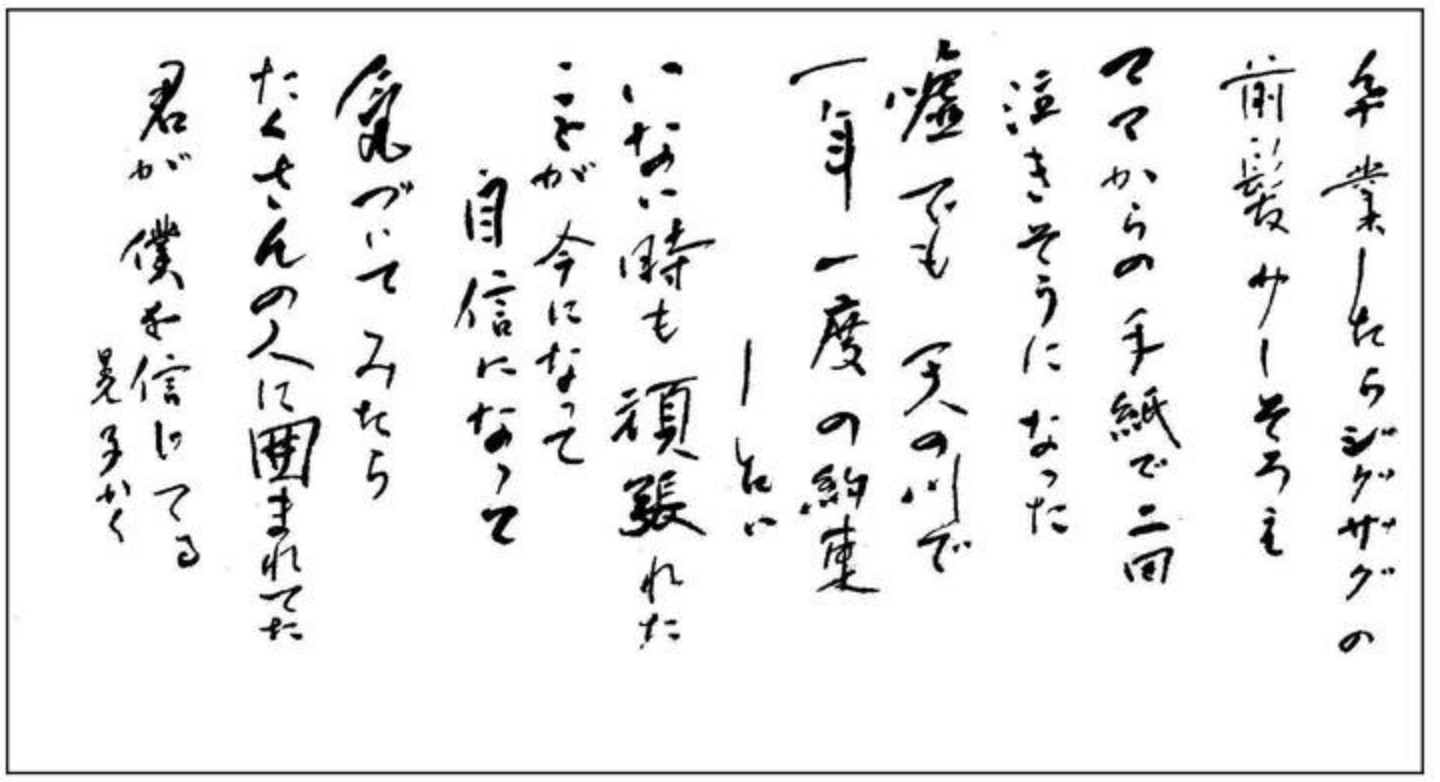


一六・田嶋晃子

創作　調和体　一青窈『影踏み』　全紙

「卒業したらじぐざぐの前髪少し揃え
ママからの手紙で2回泣きそうになった
嘘でも天の川で一年一度の約束したい
いないときも頑張れたことが　今になって自信になって
気づいてみたらたくさんのひとに囲まれてた
君が僕を信じてる」

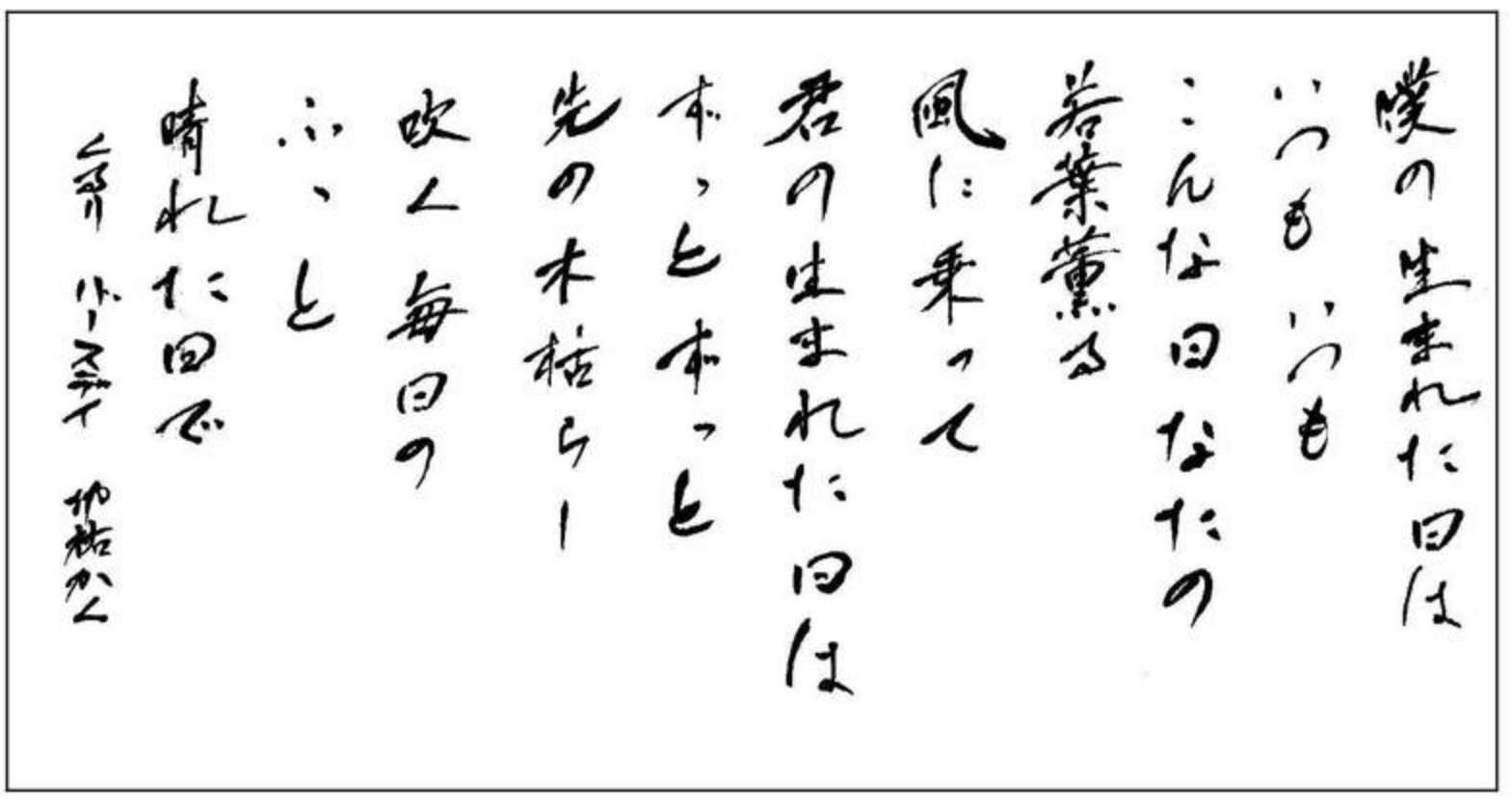
一青さんの詩に共感して、調和体に挑んでみました。この作品に、大切な人達への『想い』を込めたつもりなのですが…中々難しかったです。



一七．竹倉功祐

創作　調和体　くるり『BIRTHDAY』全紙

「僕の生まれた日は　いつもいつもこんな
日なたの若葉薫る風に乗って
君の生まれた日は　ずっとずっと先の
木枯らし吹く毎日のふっと晴れた日で」



いつ初雪が降ってもおかしくないような、初冬の北海道で僕は生まれたそうです。それから２０年経ち、爽やかな情景が浮かんでくる、くるりの歌詞に惹かれて筆をとりました。

一八、一九．仲宗根咲子

張弼『七言絶句軸』（一八．臨書、草書、半切）
（一九．創作、楷書、半切）

「去年南群賞元宵歌吹声中度画橋爛漫新詩誰得紅梅零落路迢遥」

一つは草書の臨書で、もう一つはそれを楷書にしてみました。臨書は情緒不安定な感じを出すように、楷書はきっちりした字体にして臨書と対比させようとしました。





二〇・津島由衣

創作　行草体『胡蝶の夢』　半切1／3

蝶々がお花畑の上を舞う中、私たちは自分の夢に向かって頑張っている。来春の私たちの進路を決めるために。

それが社会人になるための就職活動だったり、大学院進学に向けての勉強だったりと、夢はそれぞれ違うけれど、壁にぶつかりながらも一生懸命に頑張っている姿を表現してみました。





This book was
made by the LeME